

農業土木

第482号

ISSN 0289-1735

題字は福澤達一 前連盟委員長筆

1990.2

目次

巻頭言	吉川 汎	1
提言	黒田 忠雄	2
視点	高橋 貞三	4
論点	丹羽 昭	6
制度	荘林幹太郎	8
農地法シリーズ	瀧戸 淑章	11
海外情報	鈴木 眞熙	14
新しい農村	高山 義輝	16
	安澤 寛	16
地方だより	四門 隆	20
	三浦 敏夫	22
スポーツ	毛井 孝雄	24
会員の声	瓜生 隆宏・高木 邦昭	26
	下河辺浩弥・宮川 達美	28
	大市 克美	30

1. 技術者のこころ



瓜 生 隆 宏

近ごろ、地球的規模の環境破壊問題について耳にすることが多くなった。私はこのことを考えるたびにいつもジレンマに落ち込んでしまう。環境破壊というのは人類が今の状態のままに開発や発展を続ける限り、なくならないのは明らかである。そういった人類の営みを否定することは現代の社会システムそのものを否定することである。ひいては、その社会システムに組み入れられた自分の生活基盤をも否定してしまう。だれもが何とかしなくてはと思いつつも、何ら明解な打解策が得られていないのはこういった所にある。

さて、このジレンマの中で、ふと私が思うのは、まだ工業化社会が訪ずれる前の我々の祖先の知恵のことである。つまり、自然循環系の中にうまく入り込み、その中から恵みを得て生活していた人々の知恵についてである。彼らにとって自然は畏怖すべきものであったが、その本質を読みとれば豊かな恵みをもたらしてくれた。自然の本質を読み取り利用する能力が技術であり、その技術を持つ者が農村社会を時として訪ずれる技術者であった。

そんな古代の技術者たちのうちで私の興味を引くのは、各地に溜池や水路などを数多く残したと伝えられる「行基」や「空海」といった高僧たちである。彼らは各地で布教活動をした仏教家としての姿の外に、我々と同じ農業土木技術者としての姿も持ち合わせていた。水理学や土質工学といった近代科学以前に巨大な堤や水路を人力だけで造りあげていた。驚くべきことに空海は満濃池の改修をわずか二年でやりとげたと伝えられる。それ以上に嬉しいのは、彼らの造った堤などが何

千年の時を経て今なお水をたたえ、なおかつ周囲の自然と一体となって我々の目前に存在していることである。

仏教の教義は自然体となり宇宙と一体となることだと言われる。彼らの宗教がこういったものを目ざしたか否かは論ずるところではないが、私は彼らの農業土木における仕事の痕跡を見るとき、そういった宗教哲学をかいま見る気がしてならない。

話をもどそう。

巨大なエネルギー（化石エネルギー）を手に入れた近代技術は我々に爆発的な繁栄をもたらした。しかし、残念なことにその技術はそれに見合う哲学を持ち得なかった。それゆえに、今になって数多くの問題が我々にふりかかって来たのだと私は思う。現在、我々が数多く造っている構造物は、あの空海らの造ったものほど長い時を生き残るだろうか。現代の農業用施設は石油や電気がなければ何と無力になることか。それに比べ、何千年の時をつらぬいて力強く現代に残る溜池群を造った空海らの、宗教家でなく技術者としての哲学に我々は学ぶべき所が多い。

我々の生きていくうちに環境問題など考えなくても大丈夫というのも一つの考え方だろう。しかし、過去から自然の本質を読み取り、自然の恵みを取り出す技術を生業としてきた我々農業土木技術者が、今こそその「技術者の精神」を発揮し、環境問題を考えていく時が来たと思うのは私だけであろうか。

(兵庫県農地整備課主任)